

社会情報学の〈未来〉

On the Future of Socio-Informatics

伊藤 守

1. はじめに

社会情報学 (Socio-Informatics) という名称は吉田民人が1967年に公表した論考「情報科学の構想」ではじめて登場したと考えられる。その後、日本国内では1980年代後半から、大学教育における情報処理やコンピュータ・リテラシー分野の重要性が認識される中で、情報工学、メディア情報学、情報メディア学といった名称を冠した学部や学科が相次いで設立され、社会情報学部や社会情報学科も次々に組織された。もっとも早く学部として組織されたのは札幌学院大学社会情報学部であり、その後も群馬大学社会情報学部、大妻女子大学社会情報学部、呉大学（現在広島文化学園大学）社会情報学部、京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻も設立された。さらに、同時期、東京大学新聞学研究所が社会情報学研究所に改組されたが、これも人文社会科学の分野でも情報現象に関する研究の重要性が認識されたことを物語るものだろう。

このような経緯からみると、社会情報学は、情報社会の進展に伴い、社会の様々な分野で必要とされる人材、すなわちコンピュータ活用能力をもった人材育成をおこなう教育研究機関の名称として社会に浸透してきたと言える。

しかしながら、一方で、社会情報学という名称を最初に提示した吉田民人や、もっとも

早い時期に社会情報学部を創設した田中一が、他の学問分野と同様に、明確な対象領域、固有の方法論を備えた「ディシプリン」として社会情報学を構想したことが忘れられてはならない。そして、この構想に沿うかたちで、この間「ディシプリン」としての社会情報学の確立を志向する多くの理論的研究がおこなわれてきたのである。さらに、海外でも「社会情報学」という名称を冠する学会組織が存在することは、日本の学術という文脈を離れて、社会情報学がグローバルに発展する可能性を有することを示唆する。

このような国内外の研究の積み重ねを通して、社会情報学は、「情報の「理」を探究するとともに、社会における情報現象の総体を解明する学問」として展開している。その一つの成果が、日本学術会議情報学委員会が纏めた「情報学」分野の参照基準のなかに「社会情報学 (の分野)」が明確に位置付けられたことである。

2. 情報学の参照基準と社会情報学

日本学術会議は、各学問分野が高等教育機関で教授すべき教育内容を明示することを目的として、参照基準の作成を行った。情報学の分野でも、2013年からこの参照基準の策定に取り掛かり、2016年3月に『報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学』（以下、「参照基準」と表記）を公開した。情報学は、これまで、コンピュータ・サイエンス、プログラミングなど、

ITO Mamoru 早稲田大学教育・総合学術院
(社会情報学部在籍 1991年4月～1995年3月)

コンピュータのハードとソフトにかかわるテクノロジー開発を包括する『理系』の学問分野として考えられてきた。しかしながら、この策定の過程で、情報学は、情報概念の原理的探求の領域としての「基礎情報学」、「社会における情報現象」を対象とする「社会情報学」を扱う人文社会科学分野、そして理工学分野とにまたがる広範囲な領域を包括する、「学術的な立場から定義された…知的体系」として定義された。基礎情報学の分野からは西垣通、社会情報学分野からは筆者（伊藤）が参加して具体的な検討を進めた。これ自体、画期的なことと言わねばならない。以下、参照基準の概要を述べておこう。

3. 情報学における社会情報学の位置

「参照基準」では、情報学の基本について以下のように述べている。「情報分野の専門性は、技術的な流行や個別のアドホックな手法の寄せ集めではなく、学術的な立場から定義された情報学と呼ぶべき知的体系に即して成立するものと考えられる。情報技術が急速に発展進歩を続けている中で、学術体系としての情報学を定義することは簡単ではないが、情報学の学術体系なくしては、情報学に関係する教育(情報教育)は日進月歩のコンピュータの操作技術の習得だけに矮小化され、情報社会の存立そのものが危うくなってしまうだろう」と指摘し、「知識体系」「学術体系」の重要性を強調している。

その上で、現時点における「知識体系」を次のように提示している。第1に、「情報学は、情報によって世界に意味と秩序をもたらすとともに社会的価値を創造することを目的とし、情報の生成・探索・表現・蓄積・管理・認識・分析・変換・伝達に関する原理と技術を探求する学問である」と規定している。第2に、「情報学は、諸科学との境界において新たな応用分野を恒常的に生み出しているが、……現時点においては、情報学の専門家とな

るためには、情報学の最も基本的な中核部分を体系的に学ぶことがきわめて重要である。なぜなら、計算理論から社会情報学に至る学問の流れは、決して一つ一つが独立ではなく、互いに密接に関連しているからである。よって、本参照基準では、社会情報学までを含む最も基本的な中核部分に焦点をしばって情報学を記述することにする。」

上述のように、社会情報学は、情報学の中で中核部分をなす学問領域としての位置を明確に与えられている。

では、情報学の中核部分はどのような分野から成るのか。「参照基準」では、5つの中核部分を明記している。

第1は、情報一般の原理であり、「基礎情報学」と言うべき分野である。

第2は、コンピュータで処理される情報の原理である。

第3は、情報を扱う機械および機構を設計し実現するための技術である。

第4は、情報を扱う人間社会に関する理解である。

第5は、社会において情報を扱うシステムを構築し活用するための技術・制度・組織の分野である。

これら5つの分野から成る情報学の中核部分の中で、社会情報学は、言うまでもなく、上記の第4の領域にあたる。

4. 社会情報学の今後の展開

この「参照基準」を作成する過程と同時並行的に、西垣と筆者（伊藤）は『よくわかる社会情報学』（西垣通・伊藤守編、ミネルヴァ書房、2015年）を刊行し、生命体の情報過程から人間社会における情報技術の発展という歴史的な過程の中に、コンピュータで処理される情報と情報伝達を位置づけることで、「情報を扱う人間社会に関する理解」に資する「知的体系」を提示することを試みた。

この本の構成が、現時点における、社会情

報学の一つの輪郭を示している、と西垣・伊藤は考えている。だが、この構成は学問研究の進展によって大きく変化するものであり、10年後あるいは20年後に、社会情報学がより一層多角的・多面的に展開されることで、この構成自身が大きく組み換えられていくだろう。そのことを、西垣、伊藤も大いに期待している。

社会情報学の今後の発展の道筋を展望することは容易ではない。ここでは、私見にすぎないが、今後の方向性を示唆しておきたい。

社会情報学の中核部分について3点だけ述べておく。

第1は、メディア環境の中での知覚認識にかかわる研究が重要となることを指摘しておく。今後、ますます認知科学および哲学分野における知覚・認知に関する研究がコンピュータ科学の分野のパターン認識や機械学習などの研究と関連・連携し合いながら、あらたな情報技術が登場し、より複雑化した社会情報環境が構築されていくだろう。このデジタルメディア環境下における人間の知覚・認識と制御の問題を分析評価することが一層求められていくと考える。

第2は、多種多様な情報が高速で移動する社会環境の下での大きささまざまな集会的行動がこれまでにないかたちで成立していくだろう。その動態過程を情報現象として分析することが要請される。また、この問題は社会的意思決定過程に関する研究とも関連しており、この分野の研究の進展が大いに期待される。

第3は、社会情報学分野に固有の分析方法・分析手法の展開・前進である。すでにビックデータ処理など、様々な方法が提示されるようになったが、情報の認識と分析に関わる原理と応用技術の革新は、社会情報現象の解明により寄与することになろう。上記の1な

らびに2で指摘した課題も、あらたな分析方法の適応によってより精緻な知見が生み出されることが期待できる。

すでに情報学で発展してきた情報の認識と分析に関する方法は、情報学に固有の分野だけでなく、医学、生物学、文学、歴史学、地理学、経済学などあらゆる分野の研究に深く結びついて、いわば応用人文社会情報学とでも言うべき領域を開拓しつつある。こうした領域も含めれば、情報学はわれわれが予想している範囲を超えて拡大し進化しているとも言えよう。

その中で、社会情報学は、人間社会におけるパーソナルでミクロなコミュニケーションから、文化現象や公共的空間におけるマクロ情報現象まで、あらゆる情報現象を、通時的にも、共時的（同時代的）にも、解明する知的体系としてさらなる展開を遂げていくだろう。

参考文献

- 吉田民人(1967=1990),「情報科学の構想」『自己組織性の情報科学——エヴォルーションニストのウィーナー的自然観』新曜社
- 西垣通・伊藤守編(2015)『よくわかる社会情報学』ミネルヴァ書房
- 西垣通(2008),『続 基礎情報学——「生命組織」のために』NTT出版
- 西垣通(2004),『基礎情報学——生命から社会へ』NTT出版
- 伊藤守(2013),「情報と情動——主知主義的な枠組みから情報概念を解き放つ」『情動の権力——メディアと共振する身体』せりか書房
- 田中一(1997),「情報と情報過程の層序」『社会情報学研究 創刊号』No.1
- 日本学術会議情報学委員会・情報科学技術教育分科会編(2016)『報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学』